



Short ショートコメント

★★★

美しい夏 (The Beautiful Summer)

2023年／イタリア映画

配給：ミモザフィルムズ／111分

2025（令和7）年8月11日鑑賞

テアトル梅田

Data 2025-73

監督・脚本：ラウラ・ルケッティ

原作：チェーザレ・パヴェーゼ

『美しい夏』（河島英昭訳、岩波書店）

出演：イーレ・ヴィアネッロ／ディーヴァ・カッセル／ニコラ・マウパ

みどころ

1940年発表のイタリア文学界最高峰の小説が、なぜか今映画化！時代は戦争前夜の1938年、舞台はイタリアのトリノだ。

田舎から都会に出て洋裁店で懸命に働く16歳の少女にとって、モデルをしている19歳の少女とその周りの画家たちの“サロン”はあまりにも異質なものだが、怪しげな魅力でいっぱい！煙草、恋、セックス、絵の（ヌード）モデル等々、彼女にとっての“ひと夏の経験”的功罪は？

憧れの先輩美少女が梅毒！後半からはそんなあつと驚く“失意の展開”だが、それでも、本作ラストに見る明日への希望は如何に？

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

◆イタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼが1940年に執筆し、イタリア文学界の最高峰と称されるストレガ賞を受賞した小説『美しい夏』が、なぜか今映画化！時代は戦争前夜の1938年、舞台はイタリアのトリノだ。『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）は、戦争前夜のオーストリアを舞台に、修道女マリアがトラップ一家の一員になっていく姿を感動的に描いていたが、本作は16歳の少女ジーニア（イーレ・ヴィアネッロ）の目から見た“ひと夏の経験”を、女性監督ラウラ・ルケッティの脚本と演出で描くもの。「あの頃はいつもお祭りだった」。それが原作の書き出しだそうだが、本作の冒頭に見る「お祭り」とは……？

◆ジーニアは洋裁店で働いていたが、都会にも勉強にもなじめず鬱屈している大学生の兄と違い、何事にも前向きな少女だ。そんなジーニアにとって、仲間たちと一緒に川辺に集まるイベントはそれ自体が一種の「お祭り」だが、そこに初参加したのが、いきなり船の上で下着姿になって川に飛び込んできた長身の女性アーメリア（ディーヴァ・カッセル）だ。アーメリアはジーニアより3歳年上だが、モデルと公称し、裸姿も辞さないような彼女の先進性（？）は背丈だけではなかつたらしい。そんなアーメリアの先進性と都会性、

そして彼女の裸を描いている画家の男たちのサロンに、ジーニアが一種の怖いもの見たさの気持ちを含めて惹かれていたのは当然だ。

現在、朝日新聞に連載中の『語る 人生の贈りもの』は、加賀まりこを特集中。1943年生まれだから、私より6歳年上の女優・加賀まりこは小悪魔的なルックスと高い演技力で人気女優になったものの、「歯に衣着せぬ発言」と強気な言動のため“生意気”的レッテルを貼られ、尖ったキャラクターイメージでお馴染みとなってしまった日本には珍しい種類の女優だ。そう考えると本作にみるアーメリアは、まさにあの時代の加賀まりこ。そんな女性の生きざまに興味を持ち、憧れていったジーニアの「ひと夏の経験」は・・・？

◆ちなみに中・高生時代の私の映画上のマドンナは、1945年生まれだから私より4歳年上の吉永小百合だった。すべての面において優等生で誰からも好かれた吉永とは正反対の性格で、生涯その生き方を貫いた加賀まりこは、『月曜日のユカ』（64年）で鮮烈なデビューを飾ったが、残念ながら同作を私は観ていない。彼女は小学生の時から、隣町である神田神保町の古本街に通い、瀧澤龍彦翻訳の「マルキ・ド・サド選集」を愛読していたというからすごい。私は同作を大学入学直後に大いなる期待を持って読んだが、日本語訳のヘタクソさもあって全然面白くなかったし、また全然興奮もしなかったことをよく覚えている。しかし、小学生の加賀まりこは同作をどのように読んだのだろうか？大いに興味のあるところだ。

◆ジーニアがそんな女性アーメリアに惹かれ、さらに、アーメリアや画家たちの「サロン」に惹かれていた理由は、私が、大学入学を契機に大阪の下宿で一人生活始めた当時の自分を思い返してみればよくわかる。大学の授業には何の魅力も感じなかったが、私が惹かれたのは、第1に大学内での学生運動の仲間たち、第2に下宿生活で夜ごと集まる議論好きな先輩や仲間たちだ。松山の中・高生時代の“押し付け教育”に飼い馴らされず、反感いっぱいだった私にとって、その両者はかつて経験したことのない充実した時間となり、以降私の人格を形成する根幹になっていた。

それと同じように（？）、ジーニアはアーメリアのモデルとしての仕事内容やその職場、そしてその周辺の画家たちに興味を持ち始めたから、そこから彼女の人生がガラリと変わったのは当然だ。もっとも、それによってジーニアは、画家たちの高色な目（？）にさらされることになったから、本人は楽しそうだが、兄の目にはそりやヤバイ！また、アーメリアとの交際にかまけた結果、ジーニアはせっかく洋裁店で与えられたチャンスを生かすこともできないことに・・・。

私も大学2・3回生頃までは実家からかなり心配されていたようだが、16歳の少女ジーニアに対する兄の心配はそれ以上！煙草を吸い始めたり、酒を飲み始める程度なら未だしあが、男関係がどんどん広がった上、女同士の怪しい関係まで見えてくると・・・。

◆美女 2 人が主役の映画といえば『中国の植物学者の娘たち』(05 年) (『シネマ 17』442 頁) をはじめとして、美少女を見るだけで十分なお楽しみだが、それは本作も同じ。本作でジーニア役を演じた女優は『墓泥棒と失われた女神』(23 年) (『シネマ 56』96 頁) で主人公の恋役を演じた女優イーレ・ヴィアネッロだが、注目すべきはアーメリア役を演じた長身の女優ディーヴァ・カッセル。

彼女は“イタリアの至宝”と称される女優モニカ・ベルッチの娘で、2022 年までドルチエ&ガッバーナの香水のキャンペーン・モデルを、2024 年からはディオールのアンバサダーを務めるなど、早くからその美貌がファッション業界で注目されていたらしい。そんなディーヴァ・カッセルが本作で、女優として本格演技に初挑戦！これは、何が何でも直接自分の目で確認しなければ！

◆私が煙草を生まれて初めて吸ったのは大学 1 年生の夏ごろだから、17 歳の時。それと対比するまでもなく、16 歳のジーニアが煙草を吸っていないのは当然だが、19 歳にしてスパスパ吸っていたアーメリアからの勧めでも断っていたジーニアが、画家（男）から勧められると・・・？そして、その後は・・・？煙草を吸うことが不良への道の第一歩であることが本作を見ていると、よくわかる。

他方、私の学生時代、男たちの興味の最大の対象は当然女であり、セックスだから、女にまつわる話題は各自各様いろいろあった。そんな中で最悪の話は性病、とりわけ、梅毒に関する話題だった。梅毒になれば鼻が曲がってしまう・・・などという話が、まことしやかに語られていたものだ。

◆ここで私がなぜそんな話を書くのかというと、それは何と、本作後半「時々咳き込むのはタバコのせい？」、「タバコをやめたら？」とジーニアから言っていたアーメリアが、実は梅毒に罹患していることが、アーメリアの口から語られるためだ。ええ、ウソ！しかし、もし本当なら、感染の元は彼氏のあの画家？もちろんその疑いで、彼自身もすぐに血液検査を受けたが陰性だったとのこと。アーメリアの梅毒感染の原因が性交渉であることは明白だが、彼女のセックスは奔放だったため、その感染者は特定できないらしい。なるほど、なるほどと。と、納得できる問題ではないから大変だ。それを聞いたジーニアは一体どんな反応を？

そんな興味を持って、本作後半からの「ひと夏の経験」の結末をしっかりと確認したい。アーメリアは若いし、強いから、「梅毒も新たに付き合い始めた医師からたくさん注射を打ってもらえば治るよ。」と画家は言っていたが、さて・・・。

2025（令和 7）年 8 月 13 日記